


教育研修のご案内

2026年6月

 株式会社プライド



トレーニング・サービスのご紹介

1. トレーニング・サービスの特徴

1) 方法論をベースとした研修

システム開発をエンジニアリング的に進めるための原理となる考え方（コンセプト）とその考え方に従って具現化したシステム開発の方法（手順、成果物、適用技法、必要なスキル）を核とした「方法論」をベースに、研修コースを開発・実施しています。

2) コンサルタントが講師を担当

様々な分野におけるプロジェクト開発標準の策定、トレーニングや要員への定着支援といった準備作業、プロジェクト開始後におけるプロジェクト計画の立案およびプロジェクトコントロールを支援しております。それらの経験を研修にフィードバックすること、お客様の事情にあった課題に適応することによって、より実践的で効果的・効率的な研修を提供します。

3) インタラクティブ性（アクション性）の重視

研修コースで重視しているのは、具体的な事例にも続く双方向の対話を通じてのみ得られる「気付き」です。ケーススタディや小演習を通じて教科書的な知識と自らが実践した結果との差分＝「気付き」を得ていただきます。

4) 顧客要望によるカスタマイズ

お客様の要望に合わせて標準研修コースをカスタマイズしたり、標準研修コースに該当するコースがない場合は要望に合わせて開発し、実施いたします。カスタマイズ例としては、「自社の開発標準に合わせたカスタマイズ」や「標準フレームワーク（SLCP、PMBOK等）との関連付け」等の例があります。

5) 米国PMI(*1)の認定研修パートナー「ATP」

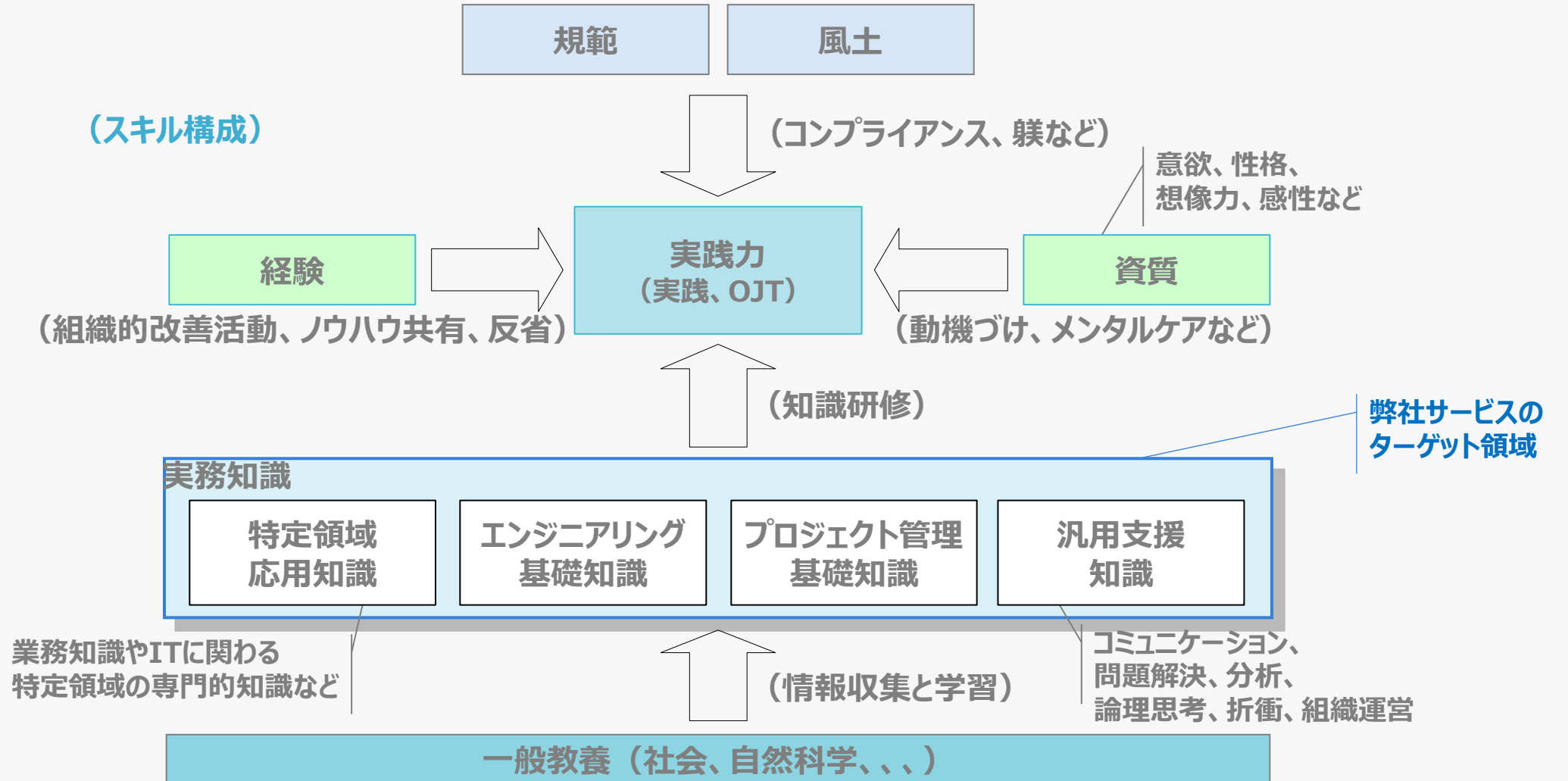
2009年9月、当社は米国プロジェクトマネジメント協会（PMI）からR.E.P.として承認され、PDU/Contact Hoursを発行してまいりました。2021年1月、PMIが設定した新たな枠組みに対応し、引き続き「ATP」として承認を受けています。プロジェクト・マネジメント研修ならびにシステム開発マネジメント系のスキル研修は、米国PMIの研修品質基準を満たしたものを提供いたします。



*1: 米国Project Management Instituteは、プロジェクト・マネジメントにかかわる各種活動を実施しており、プロジェクト・マネジメント知識体系（PMBOK）の出版やPMP資格（プロジェクト・マネジメント・プロフェッショナル）を認定している機関。

2. トレーニング・サービスのターゲット領域

弊社トレーニング・サービス（知識研修）の位置付けは、以下のように認識しております。



3. トレーニング・サービスの体系

標準研修の体系を以下に示します。各研修コースの概要は、添付資料「研修コース（標準コース）一覧」をご参照下さい。

		初級	中級	上級
方法論系 研修	システム開発			Ax-1 : AxSEM®概説コース Ax-2 : AxSEM®概説&IC構築体感コース
		マネジメント系 研修	プロジェクト管理	PM-1 : プロジェクトマネジメント・コンセプトコース PM-2 : プロジェクトマネジメント・演習コース PM-3 : 障害対応リーダー 養成コース
プロジェクト実践	PP-3 : WBS作成の技術コース PP-1 : QFDによるソフトウェア品質統制コース PP-2 : 一括委託管理コース（発注編／受入編）			
技術・技法系 研修	提案力			T-1 : 提案型スキル養成コース
	問題解決力	T-2 : 問題解決技法基礎&演習コース	T-3 : 討議型問題解決コース	
	コミュニケーション	T-5 : 図表化技法実践コース	T-4 : ビジネス交渉力強化コース T-6 : 現場で使えるファシリテーション・スキルコース	
			T-8 : データモデリング・ベーシックコース T-10 : これからのデータ利活用の原理原則コース	T-7 : ビジネスプロセスモデリングコース T-9 : データモデリング・アドバンスコース T-11 : データ活用基盤構築スキル獲得コース
	モデリング			
非機能要件／テスト		T-12 : システムテストの進め方コース		

初級 : 1~2年の実務経験

中級 : 3~4年の実務経験

上級 : 7~8年の実務経験

各研修コースと分野／システム開発工程の関連は以下のとおりです。

分野／工程	コース	Ax-1 AXSEM®概説コース	Ax-2 AXSEM®概説&IC構築体感コース	PM-1 プロジェクトマネジメント・コンセプトコース	PM-2 プロジェクトマネジメント・演習コース	PM-3 障害対応リーダー養成コース	PP-1 QFDによるソフトウェア品質統制コース	PP-2 一括委託管理コース (発注編／受入編)	PP-3 WBS作成の技術コース	T-1 提案型スキル養成コース	T-2 問題解決技法基礎&演習コース	T-3 討議型問題解決コース	T-4 ビジネス交渉力強化コース	T-5 図表化技法実践コース	T-6 現場で使えるファシリテーター・スキルコース	T-7 ビジネスプロセスモデリングコース	T-8 データモデリング・ベーシックコース	T-9 データモデリング・アドバンスコース	T-10 これからのデータ利活用の原理原則コース	T-11 データ活用基盤構築スキル獲得コース	T-12 システムテストの進め方コース	
コンセプト		○	○	○																		
プロジェクト管理				○	○	○			○	○												
問題解決										○	○	○	○	○	○							
データ分析																	○	○	○	○		
RFP策定										○												
標準化																						
品質管理						○	○															
システム化企画（情報化戦略）		○	○																			
システム化構想		○	○																			
システム化要求分析			○																			○
システム機能設計																○						
業務運用手順設計																						
移行手順設計																						
システム運用設計																						
アーキテクチャ設計																						
ソフトウェア実装設計																○						
ソフトウェア詳細設計と製造																						
統合テスト（機能テスト含む）																						
システムテスト																						○
ユーザー実証テスト																						○
移行および運用						○		○														
システム監査																						

各研修コースの詳細

Ax-1 : AxSEM[®]概説コース (半日)

■ 標準カリキュラム

【半日】

1. DXの2つの要素
2. トランスフォーメーションを理解するための着眼点
3. 情報の本質をとらえ直す (制御のための情報とは)
4. ビジネスのパフォーマンスを決定する知 (差異概念)
5. ビジネスを加速する、非IT施策の重要性

■ 目的

- 本講座では、企業の情報化を継続的に推進するための要点は「情報の再認識」であるとの仮説を掲げ、その賛否を問います。

■ 概要

- 私共の考える「情報」は、「受け手の認識に基づく解釈」です。
- 情報化に必要なのは、この認識に基づく「情報」を用いて行われる高度な判断業務を支える人材配置のバランスを取る力であり、また、そのバランスを取り続ける文化を育む力です。
- この2つの力を、弊社の経験に基づく事例を通してご紹介し、今取り組むべき情報化の推進方法をご理解いただきます。
- 現代の情報化プロジェクトが置かれた状況を俯瞰してIT組織が認識すべき新たな課題を提示し、過去の失敗にも立ち戻りながら、改めて何をなすべきかを皆様と共有します。

■ 目標到達レベル

- DX推進の課題に照らして、VUCAの時代に相応しい情報の本質を理解できる。
- 自社の実体に照らして、トランスフォーメーションすべきものを説明できる。
- 組織の活動を制御する情報をその作用に応じて4レベルに分類できる。
- 情報の4レベルに応じた人や組織/コンピュータシステムへの配置が設計できる。

■ 受講者の前提知識

- 7～8年の実務経験、もしくは「応用情報技術者試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 12名

■ 実施形態 対面：○ / オンライン：×

Ax-2 : AxSEM®概説&IC構築体感コース（1日）

■ 標準カリキュラム

【1日】

1. DXの2つの要素
2. トランスフォーメーションを理解するための着眼点
3. 情報の本質をとらえ直す（制御のための情報とは）
4. ビジネスのパフォーマンスを決定する知（差異概念）
【ディスカッション①】ICをドライブするキーマンの特定
5. ビジネスを加速する、非IT施策の重要性
【ディスカッション②】現場の変革を継続させる施策

■ 目的

- 本講座では、企業の情報化を継続的に推進するための要点は「情報の再認識」であるとの仮説を掲げ、体感演習（ディスカッション）に基づき具体策をお持ち帰りいただきます。

■ 概要

- 私共の考える「情報」は、「受け手の認識に基づく解釈」です。
- そして情報は連鎖し、貴社のバリューチェーンに柔軟性を取り戻す「情報の連鎖（IC: Information Chain）」を形作ります。
- 情報化に必要なのは、この認識に基づく「情報」を用いて行われる高度な判断業務を支える人材配置のバランスを取る力であり、また、そのバランスを取り続ける文化を育む力です。
- この2つの力を、弊社の経験に基づく事例を通してご紹介し、今取り組むべき情報化の推進方法をご理解いただきます。

- 現代の情報化プロジェクトが置かれた状況を俯瞰してIT組織が認識すべき新たな課題を提示し、過去の失敗にも立ち戻りながら、改めて何をなすべきかを皆様と共有します。
- 加えて、参加者の課題認識に基づくディスカッションを行い、打つべき策を持ち帰っていただきます

■ 目標到達レベル

- DX推進の課題に照らして、VUCAの時代に相応しい情報の本質を理解できる。
- 自社の実体に照らして、トランスフォーメーションすべきものを説明できる。
- 組織の活動を制御する情報をその作用に応じて4レベルに分類できる。
- 情報の4レベルに応じた人や組織/コンピュータシステムへの配置が設計できる。
- バリューチェーンに柔軟性を取り戻す「情報の連鎖（IC: Information Chain）」を具体化できる。
- ICをドライブすべき組織や人に、どう対処すべきかを働きかけることができる。

■ 受講者の前提知識

- 7～8年の実務経験、もしくは「応用情報技術者試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 12名

■ 実施形態 対面：○ / オンライン：×

PM-1：プロジェクトマネジメント・コンセプトコース（1日）

■ 標準カリキュラム

【1日】

1. プロジェクト管理とは
2. プロジェクト管理の要点<18のエッセンス>
 - <立上げプロセス群>
 - 小演習①企画書の作成
 - 小演習②合意形成
 - <計画プロセス群>
 - 小演習③リスクを知る
 - <監視・コントロール・プロセス群>
 - <終結プロセス群>
 - 小演習④テーマの醸成

■ 目的

- プロジェクトマネジメントの「18のエッセンス」を理解する。
- プロジェクトのミッションを自ら規定し目標（Q・C・D）を設定することにより、「プロジェクトの成功率を確実に高める考え方（＝エッセンス）」を理解する。

■ 概要

- 数々の現場で検証されたプロジェクトを成功させたノウハウを、弊社独自の「18のエッセンス」に集約しました。
- 本コースでは、貴社のPM候補者、及び既にPMとして活躍されている方に、小演習を交えた講義により、「18のエッセンス」を体感・体得して頂きます。

■ 目標到達レベル

- 目標を達成するためのプロジェクト管理のエッセンスを習得する。

■ 受講者の前提知識

- 3～4年の実務経験、もしくは「基本情報技術者試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 18名

■ 実施形態 対面：○ / オンライン：×

PM-2：プロジェクトマネジメント・演習コース（2日間）

■ 標準カリキュラム

【1日目】

1. システム要求分析工程終了時点

【チーム演習】

場面想定：システム要求分析工程の終了目前

2. システム詳細設計工程終了時点

【チーム演習】

場面想定：詳細設計終了目前

【2日目】

3. 実装作業実施中

【チーム演習】

場面想定：納期目前

4. 全体のまとめとマネジメント意識向上の確認

■ 目的

- プロジェクトマネジメントの「18のエッセンス」を応用し、プロジェクトの現場に適用する技法を習得する。
- 問題が発生した場面を想定した総合演習への取り組みを通じて、実践する力を身に付ける。

■ 概要

- 弊社独自の「18のエッセンス」に集約されたノウハウを演習課題案件に実際に適用することにより、実戦的なプロジェクト管理ノウハウを体得する。
- システム要求分析工程終了時点、システム詳細設計工程終了時点、プログラム作成工程実施中を想定した7つの演習を通じて、各工程における典型的なプロジェクトマネジメント問題にチーム演習形式で取り組む。

■ 目標到達レベル

- システム開発の各工程で陥りやすい問題を察知し、回避できる。
- ステークホルダの要望を満たすための調整や課題管理、変更管理ができる。

■ 受講者の前提知識

- 7～8年の実務経験、もしくは「応用情報技術者試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 18名

■ 実施形態 対面：○ / オンライン：×

PM-3 : 障害対応リーダー養成コース (2日間)

■ 標準カリキュラム

【1日目】

1. 保守プロマネのプロセス (解説)
2. 状況把握と初動案検討【チーム演習①】
3. 状況把握と影響調査 (解説)
4. 暫定対応策の優先順位付け【チーム演習②】

【2日目】

5. 【チーム演習②】つづき (発表)
6. 効果の判断と計画立案 (解説)
7. 暫定対応結果のフォロー【チーム演習③】
8. 対策結果の判断とn次対応 (解説)
9. まとめ

■ 目的

- 稼働中のシステムを保守している環境での「障害対応プロジェクト」を想定したプロジェクトのマネジメント方法を習得する、リーダー養成コース。
- ケーススタディを通じて保守フェーズ特有のプロセスを理解し、障害対応の各段階で必要となるプロジェクトマネジメントのポイントを体感・理解する。

■ 概要

- 架空の中堅ドラッグストアチェーン「くすりの十万石社」の、本番リリースから1年を経過した受発注システムで発生した「トラブル (インシデント)」に対して、客観的な事実を把握し悪影響の拡大をせき止め、暫定対処策と原因分析を行いながら優先順位を判断し、メンバを動かしてトラブルを解消していく。
- 上記のプロセスをチーム演習によって体験し、講師並びにメンバとノウハウを共有するとともに、対処方法とそのポイントを習得していく。

■ 目標到達レベル

- 悪影響のレベルを把握して、致命的な問題の発生を防ぐことができる。
- 2次災害発生のリスクを認識しながら、暫定対処策を検討・実施することができる。
- 同類事故再発の可能性を探り、未然に対策を横展開することができる。
- 暫定対処を行いながらトラブルの真因分析を行い、恒久措置に対処することができる。

■ 受講者の前提知識

- 7～8年の実務経験、もしくは「応用情報技術者試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 18名

■ 実施形態 対面 : ○ / オンライン : ×

PP-1 : QFDによるソフトウェア品質統制コース (2日間)

■ 標準カリキュラム

【1日目】

1. ソフトウェア品質とは
2. 品質劣化事例洗い出し【個人演習】
3. ソフトウェア品質感知の原則と特性
4. ソフトウェア品質管理の全体像
5. ソフトウェア品質管理の活動
6. 重要案件の設定【個人・チーム演習】
7. ソフトウェア品質管理の活動
8. 設計書レビューによる品質保証・改善【個人演習】

【2日目】

9. ソフトウェア品質管理の活動
10. システムテスト【チーム演習】
11. まとめ

■ 目的

- 品質管理の基本的な考え方である源流管理や重点品質に着眼したメリハリのある品質保証を実施するために、各工程でどのような品質管理を実施すべきか、またその状況の「見える化」をどう実現するかについて、エンジニアリング的なアプローチ方法を習得する。

■ 概要

- 品質管理の全体像を理解し、各工程で具体的にどのような品質管理活動をすべきか、重点的に保証すべき事項を洗い出し、開発全体を通して管理する方法を習得する。
- システム開発における品質保証上の困難な課題と、課題を解決に導く品質管理活動を演習を通して理解する。
- 4つの演習を通じて、エンジニアリング的アプローチの実践方法を体得する。

■ 目標到達レベル

- 品質管理の重要性を理解し、品質計画から設計レビュー、品質コントロールなど、各工程における品質管理活動の重要事項やポイントについて指導できる。

■ 受講者の前提知識

- 7～8年の実務経験、もしくは「応用情報技術者試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 18名

■ 実施形態 対面：○ / オンライン：×

PP-2：一括委託管理コース（発注編／受入編）（2日間）

■ 標準カリキュラム

【1日目】

1. 一括委託管理概要
2. プロジェクト要件の理解
3. 非機能要件検討【チーム演習】
4. プロジェクト計画立案
5. RFP作成【チーム演習】
6. 提案書評価

【2日目】

7. 受入実施計画【チーム演習】
8. 開発統制管理
9. 委託先状況把握と総合的対策【チーム演習】
10. 受入検収以降
11. まとめ

■ 目的

- 【発注編】一括委託の全体像を理解し、一括委託する上で法務的に知っておくべき事項、計画立案、RFP作成と提案書評価の達成すべき事項と、それらのポイントを習得する。
- 【受入編】RFP要求事項を実現するための委託先工程の管理方法、受入方法について、工程毎に達成すべき事項とポイントを習得する。

■ 概要

- 【発注編】一括委託する上での法務面のポイントを理解する。プロジェクト計画立案について、WBS展開、委託部分の範囲設定等計画立案のポイントの理解を深める。
- RFPに記載すべき事項や、提案書評価における評価ポイントの理解を深める。
- 【受入編】RFP要求事項を実現するために委託先工程の開始前の留意事項、実施時の課題・進捗の把握、品質保証、変更管理のポイントの理解を深める。受入については、受入計画・検収時に何をすべきか習得する。

■ 目標到達レベル

- 【発注編】一括委託する上での法務面のポイントを押さえることができる。WBS作成と計画立案、RFP作成と提案書評価ができるようになる。
- 【受入編】RFP要求事項を実現するための開発対象とそれに対応する成果物を整理することができる。委託先工程の開発統制管理方法、ポイントを押さえた受入の方法を習得する。

■ 受講者の前提知識

- 7～8年の実務経験、もしくは「応用情報技術者試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 18名

■ 実施形態 対面：○ / オンライン：×

PP-3 : WBS作成の技術コース (1日)

■ 標準カリキュラム

【1日】

1. 基礎編：“WBS”とテーリング（実プロジェクトへの適用）
 - WBSとは（スコープ定義、スケジュールとの違い）
 - WBSの要素 3つのWork：プロダクト／サービス／リザルト
 - ブレークダウンの観点と方法
2. 手順編1：構造階層の認識に基づくWBS展開【個人演習】
 - 工程完了基準に基づく段階的詳細化の必要性
 - 構造×工程マトリクスによるワークパッケージの抽出
3. 手順編2：WBSからスケジュールへ【チーム演習】
 - ネットワーク型スケジュール立案と見積（PERTの応用）
4. 応用編：上流工程のWBS／テスト工程のWBS
 - 上流工程の特徴／テスト工程の特徴
 - 遅延発生のパターンとスケジュール管理
5. まとめ

■ 目的

- “WBS”は単なるスケジュール表ではない。プロジェクトを“管理可能なものにする”ための基礎中の基礎である、“WBS作成のノウハウ”を体感・体得する。
- プロジェクトのスコプを見定め、成果と工程の両面からテーリングされた“WBS”を作成する技術を、その基本原理に立ち返って改めて胎に落とし、演習を通じて体得する。

■ 概要

- Work、Breakdown、Structureの本来の意味、並びにスケジュールとの違いを理解する。また、3種類のWorkの違いを知り、各々に適したBreakdownの観点を理解する。
- 2つの演習を通じて、スコープ定義からWBSへ、WBSからスケジュールへ展開する方法を体感・理解する。
- 3種類のWorkの違いを知り、各々に適したBreakdownの観点を理解する。
- スケジュール管理と変更管理、納期短縮の手法を理解する。

■ 目標到達レベル

- Work、Breakdown、Structureの本来の意味を説明できる。
- Workの本質を知り、スコープ定義を行うことができる。
- 標準的な設計・開発プロセスを活用し、スコープ定義を行うことで、WBSを構造的に示すことができる。
- WBS（プロジェクトのスコプ）に基づき、スケジュールを作成することができる。
- 遅延発生のパターンと対処方法のポイントを理解して、スケジュール管理に適用できる。

■ 受講者の前提知識

- 3～4年の実務経験、もしくは「基本情報技術者試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 20名

■ 実施形態 対面：○ / オンライン：○

T-1：提案型スキル養成コース（2日間）

■ 標準カリキュラム

【1日目】

1. 提案の考え方
 - －顧客の立場に立って考える
 - －目的指向で考える
2. 提案を要求する側の手続き
3. 提案する側の手続【チーム演習】
4. 手続きの詳細【チーム演習】
 - ①要求定義
 - ②解決策検討

【2日目】

4. 手続きの詳細（続き）【チーム演習】
 - ③提案骨子の検討
 - ④方向性の提示（初期提案）
 - ⑤内容の具体化と交渉
 - ⑥契約締結手続き
5. まとめ

■ 目的

- 顧客の立場に立ちつつも、自社の強みをアピールする提案を行うためのポイントを習得する。
そのためにまず、提案を行う上での基本的な考え方を理解し、提案を要求する側（顧客）の購買パターンやRFPの位置付けを把握する。
提案の流れの項目毎に検討すべきポイントや注意するポイントを習得する。

■ 概要

- 顧客の要求を把握するところから最終的に顧客と合意形成するまでの流れを解説と演習により習得する。
そのために、顧客の要求を把握するための方法（問題点整理の方法や背景・真因分析等）の紹介や解決策の検討ポイントや落としどころの見極め方、最終合意に至るためのシナリオの検討方法などを理解する。

■ 目標到達レベル

- 顧客の要求把握から最終合意に至るまでの流れのポイントを把握できる。
- 顧客の立場に立ちながら自社の強みをアピールする提案ができるようになる。

■ 受講者の前提知識

- 7～8年の実務経験、もしくは「応用情報技術者試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 18名

■ 実施形態 対面：○ / オンライン：×

T-2：問題解決技法基礎&演習コース（2日間）

■ 標準カリキュラム

【1日目】

1. イントロダクション
2. 問題分析：問題点ネットワークの作成
【チーム演習】
3. 解決策策定：目的-手段展開図の作成

【2日目】

3. 解決策策定：目的-手段展開図の作成（続き）
【チーム演習】
4. 解決策のまとめ：解決基本方針書の作成
【チーム演習】
5. プレゼンテーション（レビュー&講評）
6. まとめ

■ 目的

- システムには目的があり、何らかの問題を解決するものである。そもそも問題とは何か？ 事実に基づき問題点を抽出して真因を見つけ出し、解決策立案から提案に至るまでのポイントを習得する。

■ 概要

- 問題解決を構造的に捉え、アプローチの選択方法を理解する。
- 問題の定義や解決のための論理思考（ロジカルシンキング）の必要性、内容について理解する。
- 演習を通じて問題点分析と目的手段展開の方法を習得する。
- 実現のための企画書作成ならびにシナリオ展開に基づくスケジュール作成の方法を理解する。

■ 目標到達レベル

- 議論している相手の漠然とした要望を整理できる。
- 論理思考（ロジカルシンキング）を基に、問題の因果関係を見つけ出し、真因を発見できる。
- 真因の認識に基づいて効果的な対策案を吟味し、最も効果的なシナリオを提示することができる。
- 漠然とした認識をわかりやすく整理して関係者全員で共有することができる。
- 条件に応じた問題解決アプローチを選択し、解決までの手順をテーリングできる。

■ 受講者の前提知識

- 1～2年の実務経験、もしくは「ITパスポート試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 18名

■ 実施形態 対面：○ / オンライン：×

T-3：討議型問題解決コース（2日間）

■ 標準カリキュラム

【1日目】

問題分析～課題解決の考え方

演習 1. 問題認識

演習 2. 原因認識

演習 3. 問題と原因の整理

演習 4. 解決のアイデア発案

演習 5. アイデアを引き出すファシリテーション(1)

演習 6. アイデアを引き出すファシリテーション(2)

演習 7. 構造化：「目的-手段ツリー」

【2日目】

演習 8. 定量化：「KGI・KPI」

演習 9. 課題とリスクの認識

演習 10. 課題とリスクの定量化

演習 11. KGI実現までのタイムスケール

演習 12. スケジュールの具体化

演習 13. KGI実現時期の具体化・発表準備

発表 チーム内予選

発表 全体 決勝戦！

発表 2日間の振り返り

■ 目的

- 問題とは何かを把握し、問題解決のアプローチを選び手順化する技法を習得する。
- 問題事象の真因と引き起こしている結果を明らかにする。
- 解決すべき問題を特定し、解決の目的と解き方を正しく導き出し、合意形成する方法を理解する。
- 解き方に沿って、実現性や効果を踏まえた解決策の組み立て方を体得する。

■ 概要

- 問題解決をチーム演習メインで体験し、問題分析から解決策の策定に至る全体の流れを理解し、実務に応用できる基礎スキルを身に付ける。
- そのために、問題解決手順の基礎的な理論をマスタし、また、チーム演習を通じて基本動作を体感・体得する。

■ 目標到達レベル

- 参加者の漠然とした認識を整理し、混とんとしがちな会議の場をリードできる。
- 臆せず前に立ち、ホワイトボードを使って合意形成することができる。
- 問題の解き方を Value / Cost の観点で吟味した結果を示すことができる。
- 合意した解き方に沿った解決策の実現シナリオと課題を、時系列に展開できる。
- 問題・解き方・V / C ・シナリオ・推進の課題を示した企画を自ら提案できる。

■ 受講者の前提知識

- 3～4年の実務経験、もしくは「基本情報技術者試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 12名

■ 実施形態 対面：○ / オンライン：×

T-4：ビジネス交渉力強化コース（1日）

■ 標準カリキュラム

【1日】

1. 交渉とは：Win-Winの結果をもたらす合意形成のプロセス
2. 交渉のテクニックとは：出来ないことを出来ることに変換するツール
3. 交渉力の必要性：持てる技術力を最大の効率でアピールする
4. 交渉の構造：交渉のレベルと5段階のプロセス 創造力の価値
5. 交渉力の2側面：26のテクニック＝EQテク＋IQテク
6. 交渉の実際：来週のヤマ場は？【小演習】
7. 交渉の5段階と26の交渉テクニック【小演習】
 - 7-1.提示段階
 - 7-2.収集段階
 - 7-3.提案段階
 - 7-4.創造段階
 - 7-5.合意段階
8. 交渉を設計しよう：交渉設計シート【小演習】
9. まとめ：SEは交渉向き？

■ 目的

- ITビジネスの現場における交渉は、才能を持った一部の人間だけの仕事では済まない。誰もが一定の成果を上げることが期待される“交渉”について全体像を理解し、Win-Winの成果を得るための基礎を体得する。

■ 概要

- Win-Winの結論を導く交渉の原理を理解し、交渉の5段階のプロセスとそのポイントを理解する。
- 論理面と心理面のそれぞれから交渉を成功に導く方法を習得する。
- 交渉に向けて行うべき効果的な準備の方法を理解する。

■ 目標到達レベル

- Win-Winの結論を導く交渉の原理を説明できる。
- 交渉のプロセスを提示・収集・提示・創造・合意の5段階でとらえ、各段階の達成目標を示すことができる。
- 交渉の側面を論理面と心理面に分解し、その組み合わせとして交渉プロセスを組み立てられる。
- 相手の認識との差分を事前にとらえ、効果的な交渉の準備を進めることができる。

■ 受講者の前提知識

- 3～4年の実務経験、もしくは「基本情報技術者試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 18名

■ 実施形態 対面：○ / オンライン：×

T-5 : 図表化技法実践コース (1日)

■ 標準カリキュラム

【1日】

1. 文書化とは
2. 文書化の基礎理論 【図表化演習】
3. 図表化の技法 【図表化演習】
4. 文書の構造化と図表化 【図表化演習】
5. 文章表現の品質向上 【図表化演習】
6. まとめ：システム文書作成の難しさ

■ 目的

- 新システムに関する理解を促す立場の方々は、日々現場で苦勞している。運用開始後のシステムについて短時間でその全貌と構造を理解しなければならない方にとって、頼りになるのは「文書」だけである。
- 本講座では、見えない・触れないシステムを、より正確に表現するための「文書作成の技術」を「図解表現」に着目して解説し、また、いくつかの演習を通じて身に付ける。

■ 概要

- 見えない・触れないシステムをより正確に表現するための「8つの要件」と、図解表現の「4つのモデル」を理解するとともに、「文章」の品質を高める「10のポイント」を理解し、複数の小演習を通じて文章表現力もブラッシュアップする。

■ 目標到達レベル

- システム文書を作成する際、図や表を優先的に用いる論理的な表現の重要性を学び、ロジカルなドキュメンテーションを作成できる。
- 情報システムを構造的なモデルで捉え、関係する数多くの文書を体系的に位置付けるための考え方を理解できる。また、文章を改善する「10のポイント」を理解し、正確な日本語表現ができる。
- 情報システムと文書を体系付ける考え方にに基づき、システムに携わる者がなすべき「ドキュメンテーション&コミュニケーション」を、システム・ライフサイクルの中に位置づけて多数の関係者を結び付けることができる。

■ 受講者の前提知識

- 1～2年の実務経験、もしくは「ITパスポート試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 25名

■ 実施形態 対面：○ / オンライン：○

T-6：現場で使えるファシリテーション・スキルコース（2日間）

■ 標準カリキュラム

【1日目】

1. 会議とは何か、ファシリテータの役割
 - ・ディベート／コーチング／ファシリテート
 - ・話させる力、言わせる力と合意形成
 - ・立場を知り、会議の論点を明らかにする
 - ・演習①：会議スキームの見える化
2. 合意形成（≠同意）する
 - ・聞いて、理解する ヒアリングとインタビュー
 - ・伝えて、理解させる プレゼンとプロポーザル
 - ・仲立ちして、対立を解きほぐす
 - ・演習②：結論に導くメッセージづくり
 - ・次も呼ばれるファシリテータの条件

【2日目】

3. 書いて、形にする
 - ・議事録で事実を作る
 - ・図解の基礎
 - ・前に立ち、ホワイトボードを使い切る
 - ・立ち位置とペンの太さ
 - ・演習③：答えの仮説を作る
 - ・作文の品質向上
4. 交渉を設計する
 - ・会議の構造を明らかにする
 - ・Win-Winを設計する
 - ・結論に導くためにどんな資料が必要か
 - ・総合演習：ファシリテーション予行演習

まとめ

■ 目的

- ビジネスの現場において、どんな場面でも有効に活用できるファシリテーションスキルを身に着ける事で、自社を代表して結論に導くことのできるファシリテーターとなる。

■ 概要

- 伝えるポイント
 - 結論は、出るのではなく出す
 - 聞くのではなく伝える
 - こちらの意図した結論を参加者に言わせる
 - 議事録を書いてから会議を行う
 - ホワイトボードを使い切る
 - それでも取っ散らかったら？
 - 交渉ごと怖がらない（得意になる！）
 - 意図した結論が出るように資料を準備する

■ 目標到達レベル

- 会議・ミーティングをリードして、結論に誘導する力を身に付ける。
- 自社／顧客がWin-Winとなる結論を提案できる。

■ 受講者の前提知識

- 3～4年の実務経験、もしくは「基本情報技術者試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 20名

■ 実施形態 対面：○ / オンライン：○

T-7：ビジネスプロセスモデリングコース（2日間）

■ 標準カリキュラム

【1日目】

1. イントロダクション
2. プロセスモデリング解説
3. 業務機能の分析と設計（解説）
4. 現状業務機能分析【チーム演習】
5. プレゼンテーション（レビュー&講評）

【2日目】

6. サブシステム・レベルの設計【チーム演習】
7. プロセッサ・レベルの設計【チーム演習】
8. システム処理機能の設計【チーム演習】
9. プレゼンテーション（レビュー&講評）
10. 解説
11. まとめ

■ 目的

- 上流工程では、ビジネスモデルをプロセスの観点で捉え、モデル化することが必須である。
- ビジネスの現状を可視化し、また、あるべき姿をシミュレーションするためのプロセスモデリング技法を習得する。

■ 概要

- 業務プロセスのモデリング手法を習得し、各工程の目的に合ったモデリング粒度を理解する。
- さらにデータモデリング等、他の設計工程との関連や各プロセスモデル間の関連を理解する。
- DFD、IDEF0、アクティビティ図、BPMN等の各種モデリング記述手法の要点を整理し、モデリング記述手法間の互換性をチーム演習を通じて理解する。

■ 目標到達レベル

- プロセスモデルの記述対象や粒度を理解した上でビジネスモデルを把握・記述できる。
- ヒアリングや業務説明を基に、プロセスモデルを作成できる。
- プロセスモデルを使って、新業務のシミュレーションができる。

■ 受講者の前提知識

- 7～8年の実務経験、もしくは「応用情報技術者試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 18名

■ 実施形態 対面：○ / オンライン：×

T-8 : データモデリング・ベーシックコース (1日)

■ 標準カリキュラム

【1日】

1. イントロダクション
2. データ分析について (解説)
3. 関係モデル基礎理論 【個人演習】
4. データモデルの概念と方法について 【個人演習】
5. 正規化について 【個人演習】
6. データモデルの検証
7. まとめ

■ 目的

- システム開発においては、ビジネス上の要求を満たす「情報」とその構成要素である「データ」を明確に区別しつつ、明らかにする必要がある。
- 業務の視点でデータの意味を捉え、ビジネスに必要なデータ設計の基礎的スキルを習得する。

■ 概要

- データの意味に着目したモデリングの重要性や全体開発工程における位置付けを理解する。
- 関係型理論、正規化等の基本的な考え方を習得する。
- データベース設計のレベルである概念データベース (データモデル)、論理データベースから業務の実体を分析し、表現するスキルを身に付ける。
- データベースの理解および各データベース間の関連を理解する。

■ 目標到達レベル

- 業務の側面からデータの意味を整理できる。
- データを抽象化し、全体整合を図ることができる。

■ 受講者の前提知識

- 3～4年の実務経験、もしくは「基本情報技術者試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 18名

■ 実施形態 対面 : ○ / オンライン : ×

T-9 : データモデリング・アドバンスコース (2日間)

■ 標準カリキュラム

【1日目】

1. イントロダクション
2. トップダウンアプローチによるエンティティ候補の抽出【個人演習】
3. トップダウンアプローチによるデータモデリング【チーム演習】
4. プレゼンテーション (レビュー)
5. ボトムアップアプローチによる部分図作成【個人演習】
6. 部分図の統合 (解説)【チーム演習】

【2日目】

7. 新規情報要求のトップダウンアプローチによるモデリング【チーム演習】
8. 新規情報要求のボトムアップアプローチによる部分図作成【チーム演習】
9. 現状 + 新規情報要求の統合モデリング【チーム演習】
10. プレゼンテーション (レビュー & 講評)
11. データ設計 / 制約分析 (解説)
12. まとめ

■ 目的

- データモデリングの基礎を踏まえて、情報をデザインし、データベース設計を実践する上での留意点、陥りやすい問題などを、演習を通して習得する。

■ 概要

- トップダウンアプローチ、ボトムダウンアプローチ等の方法を習得する。
- 現状業務のデータ分析から新規要件を保証するデータ構造設計の方法を習得する。
- 管理対象の把握、コード問題、正規化の課題など現場で陥りやすい品質問題の解決方法について、演習を通じて習得する。
- データ定義、モデル検証、制約理論、情報系データベース構築方法のポイントを習得する。

■ 目標到達レベル

- 概念 / 論理 / 物理レベルのデータモデリングができる。
- プロセスやユーザインタフェースとの整合性を意識したデータ設計ができる。
- 基幹業務処理を念頭に置いたファイル設計ができる。

■ 受講者の前提知識

- 7～8年の実務経験、もしくは「応用情報技術者試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 18名

■ 実施形態 対面 : ○ / オンライン : ×

T-10. これからのデータ利活用の原理原則コース（1日）

～人とITの共創に向けて～

■ 標準カリキュラム

【1日】

総合演習（弊社が用意する演習課題に取り組んでいただきます。）

1. データ利活用が進まない

- ・データ利活用に「決まった答え」を求めていないか
- ・決められた通りにしか動けない「ルール病」に陥ってないか
- ・2つの行動様式：プリンシプルベース／ルールベース

2. データ利活用とは（我々は何を作り上げればよいのか）

- ・情報とは/データとは：データは「制御」のためのインプット
- ・データ利活用の成功例：データから得た人の知恵が企業の行動を変えた
- ・エントロピーの分類（IGL）と創発的な行動の関係

【演習1】それって人の仕事？

3. データ活用を支える2つの視点（タイプとバリュー）

- ・データのタイプ（と構造）を表現する：「データ・モデリング」
- ・データのバリュー（と意味）を共有する：「データ値の意味解釈」

【演習2】ビジネスの変革をデータのバリューで喚起する（値の意味共有の大切さ）

4. アジャイルでしかやれない

- ・やってみながら確かめていかないとわからない（事前に決められない）
- ・目標は「変化に追随する行動をとる組織」が利活用するデータ

5. まとめ：データによる共創環境の構築と継続

- ・改善マインドの醸成とデータの関係再確認

■ 目的

- 市場や社会の変化に対応する人や組織の創発的な行動にデータを活かすために、人とデータ（IT）の関係を原理的に見直し、経営のアジリティに貢献するための「データ利活用のポイント」を理解する。

■ 概要

- DXを旗印に、データアナリティクスやAIを採用しているが、なかなかうまくいかない。原因は、ITの利活用方法が自動化やデータ共有に偏重されていることにある。
- 本講座では、上記認識の下、データ利活用を促進してVUCAの時代に対応し続けるための「データ利活用の原理原則」を解説する。

■ 目標到達レベル

- VUCA時代の背景を理解し、今後求められる「データ利活用」のあるべき姿を捉え直す。
- データの構造を理解してビジネスのルールを表現する方法を理解する。
- ビジネスを変える行動とデータとの関係をエンジニアリング的に理解する。
- データを活用してビジネス・モデル変革を実現する環境の原理原則を理解する。

■ 受講者の前提知識

- 7～8年の実務経験、もしくは「応用情報技術者試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 18名

■ 実施形態 対面：○ / オンライン：×

T-11. データ活用基盤構築スキル獲得コース（3日）

■ 標準カリキュラム

【1日目】

1. 各領域で必要なデータの意味・呼称と活王者
2. 各領域の定義と必要なインプットの特定

【2日目】

3. データ利活用環境を活性化させる「データカタログ」の重要性
4. ビジネス・データ利活用環境を支える10の役割と職務

【3日目】

5. 各領域×内容別、組織ミッションの割り振り
6. 実装環境の選択肢
7. 多段階展開計画とアウトカム（意味的V/C）

■ 目的

- 組織が蓄積した多様なデータを効果的に活用できる基盤を構築し、ビジネス価値の最大化を目指す。
- データ活用基盤に必要な要素や設計要素を明確化し、具体的なアクションプランを策定する。
- 目指すべきデータ活用基盤の姿について部門間で共通認識を形成し、効率的な連携を実現する。

■ 概要

- データ活用における基盤構築の最新トレンドやベストプラクティスを学び、変化の激しい概念や用語を整理する。
- 組織が直面する課題を解決するために必要な基盤要件を検討し、チーム内外での理解を深める。
- 講義とディスカッションを通じて、実践的な知識やスキルを習得し、自社に適した基盤構築の方針を明確化する。

■ 目標到達レベル

- データ活用基盤の基本構成と用語を整理できる。
- 自社組織に適した基盤構築の要件を明確化できる。
- データカタログの重要性と活用方法を理解する。
- 基盤構築における役割分担を整理し、自社組織に適用できる。
- 実装環境の選択肢を理解し、多段階展開計画を策定できる。

■ 受講者の前提知識

- 7～8年の実務経験、もしくは「応用情報技術者試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 18名

■ 実施形態 対面：○ / オンライン：×

T-12.システムテストの進め方コース（1日）

■ 標準カリキュラム

【1日】

1. 品質管理とQFD手法

- ・品質管理活動の全体像
- ・重点品質保証を行うための“QFD手法”

【演習①】QFD 2の作成

2. テストの原理と基本的な考え方

- ・システムテストの位置づけとテストの手法：V & Vの考え方と適用
- ・ユーザ実証テストの考え方
- ・テスト・ケースの導き方

【演習②】テストパターンの洗い出し

3. テスト結果分析とリリース判定

- ・テスト結果分析の観点

【演習③】リリース判定

まとめ

■ 目的

- リリース直前に実施する一連のテストでは、
 - ✓ 上流工程でユーザーが提示する要件は、構造的に分解して可視化することが難しい
 - ✓ テスト工程の後半に至るまで、上流工程の要件を正確に継承することが困難であるといった、“システムテスト段階固有の難しさ”がある。
- 本講座は、上記の課題に対応した“システムテスト”の実践的な方法を解説する。

■ 概要

- 設計成果物から網羅性を考慮してテストケースを導く方法を理解する。
- 要件の重要性を判定するための“QFD手法”と、その適用方法を理解する。
- V & V：検証（Verification）と妥当性確認（Validation）の考え方を理解する。
- 受入テストや品質判定など間接的なテストを行う際の留意点などを中心に、“システムテスト”の実践的な方法を体得する。

■ 目標到達レベル

- テストを含めた、総合的な「ソフトウェア品質管理」の考え方とポイントが説明できる。
- 要件の重要性を判定するための“QFD手法”と、その適用事例を実践に活用できる。
- 設計成果物から、網羅性を考慮してシステムテスト・ケースを導くことができる。

■ 受講者の前提知識

- 3～4年の実務経験、もしくは「基本情報技術者試験」合格と同程度の知識を有すること。

■ 定員

- 18名

■ 実施形態 対面：○ / オンライン：×

弊社のご紹介

プライド社の使命

人と情報の関係を、もう一步さきへ。

ビジネスにより効果的でかつ効率的な情報利活用の仕組みづくりをお手伝いします。

More Effective And More Efficient



プライド社のサービス



BPR

- ・業務改善先行のコンカレントエンジニアリング
- ・改善サイクルの定着支援



上流工程設計と設計監理

- ・上流工程支援（開発、業務運用およびシステム運用、移行）
- ・共通アーキテクチャ基盤設計支援
- ・設計監理支援



ITガバナンス

- ・中長期IT投資計画立案支援
- ・IT投資プロセス標準化支援
- ・システム開発プロセス標準化支援
- ・データ利活用推進支援



啓発活動

- ・ユーザ企業様向けシステムズエンジニアリング教育
- ・大学・大学院向け講義
- ・学会・研究会の支援

プライド社の沿革

1974年 株式会社日本システムクス設立、
情報システム開発コンサルティングを開始

1975年 米国ミルト・ブライス アンド アソシエイツより
情報システム開発方法論を技術導入

1988年 株式会社プライドとして分社独立

1994年 「オープン・システム開発標準ガイド」を公表

1999年 「別冊フェーズガイドブック」を公表
(3層構造設計、部品化設計)

2000年 「3層構造情報システム実現手法ガイド」を公表

2002年 株式会社インフォメーション・ディベロップメントの
傘下に入る

2003年 「IT調達ガイド」を公表

2008年 「情報セキュリティにおける現実的対応」を公表

2009年 Project Management Institute, Inc.より
R.E.P.としてPDUを発行する承認を獲得

2013年 「計画立案ガイド」を公表

2014年 「図表表現の技法」発表

2014年 電子情報通信学会誌に論文「ソフトウェア開発に
おけるトレーサビリティリンクの複雑さの表現と
単純化方法」を公表

2015年 「QFD を利用した品質管理ガイド」を公表

2016年 「マスタデータのGAP 分析」を公表
青山学院大学で講義を実施

2017年 「データ中心型アジャイル開発： DCAD：
Data Centric Agile Development」を公表

2019年 「システムズ・エンジニアリング方法論：AxSEM®」
を公表

2019年 青山学院大学主催の社会人教育ADPISAで講義
「データ完全性パターン」を公表

2022年 Project Management Institute, Inc.より
ATPとしてPDUを発行する承認を獲得

AxSEM®は当社の登録商標です。

PMI ATP ロゴはプロジェクトマネジメント協会(Project Management Institute, Inc.)の登録商標です。



プライド社 支援団体・啓発活動



情報システム学会の活動を支援しています。



青山学院大学・情報システムアーキテクト育成プログラムの活動を支援しています。



DAMA日本支部（略称：DAMA-J）の活動を支援しています。



米国プロジェクトマネジメント協会（PMI）から PDU's/Contact Hoursの発行を承認された教育パートナーです。



一般社団法人 日本情報システム・ユーザー協会
Japan Users Association of Information Systems

日本情報システム・ユーザー協会主催の講座を担当しています。



AxSEM® Axiomatic Systems Engineering Methodology

AxSEM® は、エンジニアリングアプローチによって、企業におけるデータ資産化を促進する方法論です。

プライド社概要

社名	： 株式会社プライド
代表	： 北村 充晴
設立	： 1988年1月
資本金	： 4,000万円
社員	： 29名(内 コンサルタント26名)
主な事業	： ■コンサルティング・サービス － BPR(Business Process Reengineering) － 上流設計および設計品質監理 － ITガバナンス － トレーニング ■アカデミア活動 － 学会活動支援 － 大学講義
主要株主	： 株式会社IDホールディングス
主要取引先	： 株式会社ローソン 東京電力グループ 三菱電機株式会社 株式会社良品計画

プライド社：コンサルティング実績事例①

顧客	期間	テーマ	概要
中央官庁	2019年8月～2020年2月	企業会計情報開示システムの調達仕様書作成支援（要件定義）	クリティカルシステムのクラウド環境への移行を前提として、データ中心型開発ツールの適用評価を含む要件定義を支援。
エネルギー系企業	2018年4月～2018年12月	受付・請求業務のデータモデリング	自由化に伴う業務拡大に対応する新システムのデータ構造を分析し、受付業務と請求業務の連携を実現するデータモデルを作成。
食品メーカー	2012年 9月～2014年 4月	グローバル拠点の統合マスタ整備	海外企業買収に伴う子会社化と、グローバル展開のための統合化。事業統合に先行してマスタ統合に着手。
大手金融機関向けシステム企業	2012年11月～2013年 4月	運用業務の標準化と組織再編によるコストダウン	顧客特性により分割されていた組織の業務分析を行い、共通業務を整備して組織再編し、リソース（人材含む）の再配置計画を立案。
食品物流商社	2006年 4月～2006年 9月	複数社統合に伴う業務標準化と物流網の再検討	複数社統合により拠点別の業務プロセスになっていた状態を分析し、業務標準化を推進し物流網の再検討を実施。
コンビニエンス・ストア・チェーン	2003年 4月～2004年10月	物流拠点業務の標準化	受発注システム再構築にあたり、物流拠点とのインターフェースを共通化。共通化に伴い、拠点内業務の標準化を推進。
金融サービス業	2000年 8月～2002年 3月	マスタ統合による業務標準化	サービスごとのマスタを利用していた状態から、統一マスタの整備により統一基準による一貫プロセスに再整備。
内装メーカー	1998年10月～1999年10月	部材事業の統合	同一の原材料から複数商品を製造し、商品ごとの組織になっていた状態を共通原材料、工程の観点から分析/整理して事業部統合することによりコストダウンを実現。

プライド社：コンサルティング実績事例②

顧客	期間	主なテーマ
エネルギー系企業	2017年2月～継続中	<ul style="list-style-type: none">● グループデータ統制業務確立へのアドバイス● データ統制業務支援● 販売工程管理プロジェクトのデータ中心型アプローチ支援● 用地プロジェクトのデータモデリング並びにPMO支援
食品メーカー	2012年12月～継続中	<ul style="list-style-type: none">● グローバル生産管理標準化プロジェクト● 情報システム関連規程整備● 予算統制業務標準化
コンビニエンス・ストア・チェーン	1999年4月～継続中	<ul style="list-style-type: none">● 情報システム部門運営● PMO運営● 標準化策定支援● 店舗システム再構築プロジェクト、● 受発注システム再構築プロジェクト● 管理会計プロジェクト

よろしくご検討ください。